【付帯資料】

声に出して読む万葉集　第四十八回

巻八　其の二

▼一四四九とは別に、大伴田村家の大嬢から妹（いもうと）坂上大嬢に贈った歌、四首

巻四　七五六～九の歌

七五六　外（よそ）に居て恋ふれば苦し我妹子（わぎもこ）を継ぎて相見む事計（ことはか）りせよ

七五七　遠くあらばわびてもあらむを里近くありと聞きつつ見ぬがすべなさ

七五八　白雲のたなびく山の高々（たかたか）に我が思ふ妹（いも）を見むよしもがも

七五九　いかならむ時にか妹（いも）を葎生（むぐらふ）の汚（きた）なきやどに入りいませてむ

大伴田村大嬢は大伴宿奈麻呂の娘で、坂上大嬢とは異母姉妹。坂上大嬢から田村大嬢に贈った歌は一首もない。二人の歌は離れていて、坂上大嬢はこのころ十歳程度。

▼一四五一の**笠女郎の大伴家持に贈る歌**は全部含めて二十九首あり、巻三に比喩歌が三首、巻四に相聞歌が二十四首あり、その内容で四期に分けられる。いずれも笠郎女の一方通行。

巻三　比喩歌、三九五～七（三首）

三九五　託馬野（つくまの）に生（お）ふる紫草（むらさきぬ）衣に染（し）めいまだ着ずして色に出でにけり

▽語釈

託馬野＝滋賀県坂田郡米原町朝妻筑摩（現米原市）かという。歌枕的に用いたもの。

三九六　陸奥（みちのく）の真野（まの）の草原（かやはら）遠けども面影（おもかげ）にして見ゆといふものを

▽語釈

真野の草原＝真野は福島県相馬郡鹿島町、真野川流域。歌枕的地名。

三九七　奥山の岩本菅を根深めて結びし心忘れかねつも

巻四　相聞、五八七～六一（二十四首）

Ⅰ　渇望期（下燃えの思慕）

五八七　我が形見見つつ偲はせあらたまの年の緒長く我れも偲はむ

五八八　白鳥の飛羽山松の待ちつつぞ我が恋ひわたるこの月ごろを

▽語釈

飛羽山松も＝飛羽山は所在未詳。大井重二郎によれば、奈良市東大寺の東北あたりの小峰。

五八九　衣手を打廻の里にある我れを知らにぞ人は待てど来ずける

五九〇　あらたまの年の経ぬれば今しはとゆめよ我が背子我が名告らすな

五九一　我が思ひを人に知るれか玉櫛笥開きあけつと夢にし見ゆる

Ⅱ　慨嘆期（燃え盛る炎）

五九二　闇の夜に鳴くなる鶴の外のみに聞きつつかあらむ逢ふとはなしに

五九三　君に恋ひいたもすべなみ奈良山の小松が下に立ち嘆くかも

五九四　我がやどの夕蔭草の白露の消ぬがにもとな思ほゆるかも

五九五　我が命の全けむ限り忘れめやいや日に異には思ひ増すとも

五九六　八百日行く浜の真砂も我が恋にあにまさらじか沖つ島守

五九七　うつせみの人目を繁み石橋の間近き君に恋ひわたるかも

五九八　恋にもぞ人は死にする水無瀬川下ゆ我れ痩す月に日に異に

五九九　朝霧のおほに相見し人故に命死ぬべく恋ひわたるかも

六〇〇　伊勢の海の礒もとどろに寄する波畏き人に恋ひわたるかも

六〇一　心ゆも我は思はずき山川も隔たらなくにかく恋ひむとは

Ⅲ　惑乱期（燃え残る思い）

六〇二　夕されば物思ひまさる見し人の言とふ姿面影にして

六〇三　思ふにし死にするものにあらませば千たびぞ我れは死にかへらまし

六〇四　剣大刀身に取り添ふと夢に見つ何のさがぞも君に逢はむため

六〇五　天地の神の理なくはこそ我が思ふ君に逢はず死にせめ

六〇六　我れも思ふ人もな忘れおほなわに浦吹く風のやむ時もなし

六〇七　皆人を寝よとの鐘は打つなれど君をし思へば寐ねかてぬかも

Ⅳ　離別期（自嘲と寂しみ）

六〇八　相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後方に額つくごとし

六〇九　心ゆも我は思はずきまたさらに我が故郷に帰り来むとは

六一〇　近くあれば見ねどもあるをいや遠く君がいまさば有りかつましじ

右の二首は相別れて後に、更に来贈せしものなり。

▼一四六四の大伴家持が久邇京より寧楽の宅の坂上大嬢に贈る歌は、巻四に別途あり。

七六五　一重山へなれるものを月夜よみ門に出で立ち妹か待つらむ

七六七　都路を遠みか妹がこのころはうけひて寝れど夢に見え来ぬ

七六八　今知らす久迩の都に妹に逢はず久しくなりぬ行きて早見な

七七〇　人目多み逢はなくのみぞ心さへ妹を忘れて我が思はなくに

七七一　偽りも似つきてぞするうつしくもまこと我妹子我れに恋ひめや

七七二　夢にだに見えむと我れはほどけども相し思はねばうべ見えずあらむ

七七三　言とはぬ木すらあじさゐ諸弟らが練りのむらとにあざむかえけり

七七四　百千たび恋ふと言ふとも諸弟らが練りのことばは我れは頼まじ